

■ご挨拶

代表理事退任にあたって



日本風力発電協会 顧問 **永田 哲朗**
名古屋大学 地球水循環研究センター 客員教授

はじめに

この度、2期4年の任期を満了し代表理事を退任することとなりました。

「日本風力発電協会」は、4年前に162団体で新たなスタートを切りましたが、その後多くの新規会員のご加入を頂き、現在の240団体を超えるまでに大きく成長することができました。この間に会員の皆様から頂戴いたしました多大なご支援・ご協力に対しまして、改めて厚く御礼申し上げます。

4年間を振り返って

この4年間を振り返りますと、東日本大震災を契機として固定価格買取制度（FIT）がようやく2012年に実現し、しかも22円/kWh、20年という水準が、新設設備のみならず既設設備まで適用されたということが、やはり風力発電業界にとっては最大の追い風になっていると考えております。

その一方で、同じ年に法で義務付けられた環境アセスメントによって、過大な時間とコストを課され、太陽光発電にはやや遅れを取ることとなりましたが、現在その短縮化や代替措置が試行されているところであり、改善の兆しは見られています。

また、風力発電拡大に向けての最大のボトルネックは系統連系であるとの認識も、この間によりやく広まってきました。現在進行している電力システム改革の議論と平行して、再生可能エネルギー拡大のための方策が同時に検討されていることは、風力発電業界にとっては大きな前進です。電力会社間や地域内の送電線拡充方策に加え、風力発電の広域運用による変動平準化や気象予測システムなど、運用面からの検討も進んでおり、今後の具体化が期待される所です。

系統問題以外にも、風力発電拡大にあたっての制度的な制約は、農地転用、保安林解除を始めとして数多くありましたが、この間の関係者のご努力によって、改善の方向に向かっていると思っています。

このところ社会の関心が急速に盛り上がってきたのは、洋上風力発電に対するものであると感じています。特に昨年は、着床式と浮体式のプロジェクトがそれぞれ2つずつ運転を開始したこともあり、国内外から大きな注目を浴びました。この度発表された本協会の風力発電導入ロードマップにおいても、洋上風力は大きな役割を担っており、新たな期待が寄せられているところであります。

風力発電の存在感を

このような絶好の機会をとらえ、長期ロードマップに即した目覚ましい拡大を実現して行くためには、先ずは至近の導入実績をしっかりと築くことにより、社会一般からの信頼感や期待感を獲得して行くことが不可欠だと思います。

今後、FIT見直しの圧力は相当高まってくるものと思われまます。また、風力発電の将来を左右する系統連系のルール作りや、洋上風力に関するインフラ整備、規制緩和などに向けても、風力発電に対するさまざまな評価や見方が出てくることは間違いありません。

こうした状況に向けて、本協会が先見的に一丸となって取り組まれ、風力発電の実態や真の価値について世の中に強くアピールして行かれるよう切に願う次第であります。

おわりに

この度、私は名古屋大学の客員教授として洋上風力の研究プロジェクトに携わることとなりましたが、本協会においてこれまで築いてきたネットワークを活かしつつ、引き続き顧問として協会活動を支援するようにとの要請を頂きました。

今後は、高本代表理事を筆頭とする新体制を側面からサポートし、風力発電業界の発展のため微力ながら尽力して参りたいと思っておりますので、これまで同様のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます